
フィオナの転生物語

ことみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フィオナの転生物語

【Nコード】

N1608Z

【作者名】

ことみ

【あらすじ】

ルーディアス王国に住む大貴族の娘・フィオレンティーナは転生者だ。12歳のおり、母親である公爵夫人につれられいったパーティで彼女は運命的な出会いを果たすのだが――？魔法あり、ラヴありの物語。

プロローグ

私の名前は、フィオレンティーナ・セリス・レンディア。転生者だ。ルーディニア王国の片隅に居をかまえている。家は貴族だ。しかも、公爵家。古くからある、由緒ある家なのだ。王家とも交流が深い。私の家は聖魔術士を代々、輩出している家でもある。兄様ふたりも、若くして出世コースにのる前途有望な若者だ。わたしは、今の家族がとっても大好きだ。

「フィオレンティーナ様。今日は、魔法の勉強の時間です。カレル先生がお越しですよ」

「ありがとうございます、ルチル。用意はできてます。先生は、どちらに？」

「もう間もなく、お越しですよ。それにしても、お嬢様の勉強は日に日に進んでいきますね。12歳でここまで教育が進んでいる、貴族の子女はお嬢様だけだと思いますよ」

鼻が高いですわ！と興奮するルチル。目を輝かせて嬉しそうに語られると、なんだか悪い気がしてしまう。本当は精神年齢20代後半だとは言にくい。ありがとうございます、とわたしは彼女に無邪気な笑顔をうかべて笑いかけた。そうしているうちに、カレル先生が部屋にこられた。

「おはようございます、フィオレンティーナお嬢様。先日の復習はすみしましたか？」

「はい、先生。高等魔法技術理論でしたね。やっておきました。今日は何をされますか？」

「そうですね、では複合魔術の実践にいたしましょうか。まずは、これを見てください」

そういうと、先生は《凍りつく風》の呪文を唱えた。すると、風とともに氷の矢がうまれ、部屋にあった花瓶が風をうけて、凍りついてしまった。わたしも、思いおなじスペルで呪文を唱える。

《風よ、すべてのものを我が意のもと、凍てつかせよ》

狙いを受けたベッドが瞬時にして凍りついた。すぐに解かなくてはいけないため、解除魔法を唱える。

《解除》

先生も同時に唱えたので、部屋の被害はゼロだ。外でやりたいのだけれど、今は冬なので中でやるものとなっている。暖かくなるまでの我慢だ。すぐに考えをやめ、先生にむきあう。このあとも、いくつかの狙いをさだめて凍りつかせ、解除するといった授業だった。高等魔法だと解除が完璧に行えるものになっている。初歩だと四次元素を覚えることから始まるから、わたしの腕は王宮でも十分通じるものだったりする。

「さすが、お嬢様ですね。これは将来が楽しみです。お兄様方に劣らぬ腕前ですよ」

「ありがとうございます、先生。これから毎日、頑張りますね」

「あらあら、フィオナちゃんは頑張りやさんね。ママたちをすぐに追い越してしまいそうだわ」

「お母様！いらしてたのなら、いってくださったらよかったのに」

そういつて近寄ると、頭をなでられた。なんだか、くすぐったい感じ。ふにゃ、と顔をやわらげるとカレル先生は頭をさげて、退出していった。ルチルにお茶の用意をしてもらって、お母様と二人きりになる。

大事な話でもあるんだろうか？ 顔に出たのだろうか、お母様はくすつ、と笑うと私に視線をあわせた。

「あのね、フィオナちゃん。今度、お城でパーティが開かれるの。お友達を作るのに、いいかと思って。ママといっしょにいきましよう」

「はい、お母様。一緒にいきます。お兄様方にはお会いできますか？ もう二ヶ月もお帰りになってません。淋しいです」

「そうね、淋しいわね。その日はいいことがあると思うから、楽しみにしておいてね」

「？ わかりました。楽しみにしておきます」

そして、その数日後。お城でパーティが開かれた。はじめてくるお城は広く、お母様とはぐれてしまった。どうしようか、とまわりをみわたしていたら、声をかけられた。

「はじめまして、レディ。お名前をうかがっても――？」

それが、すべての物語の幕開けの合図だった。

プロローグ（後書き）

魔法ものはじめました。応援よろしくお願いします☆

1. 出会い

かけられた声の主を探して振りあおぐと、16・7歳の貴公子然とした少年が風に金髪をなびかせながら、ゆったりとした微笑を浮かべていた。優しい容貌は、妙齡の貴族の令嬢方が放っておかないだろうな、という感想を一目見て持ってしまった。

「はじめまして。わたしは、フィオレンティーナ・セリス・レンディア。レンディア公爵家のひとり娘です」

「レンディア公爵家の・・・そうか、君が『レンディアの癒し姫』なんだね。風の精霊たちがここに集まって楽しそうにはしゃいでるみたいだから、みにきたんだ。思った通り、可愛い姫だね」

「そんな二つ名があるのですか？はじめて聞きました。お褒めいだいて、ありがとうございます」

そういうと、彼は有名な話だよ？と教えてくれた。パーティはもうはじまるのに、お母様はどこに行かれたのだろう？主賓に挨拶だろうか？いや、過保護なお母様のこと、私を探しているに違いない。そう考えて、呪文を唱えることに。

《風の精霊・シルフ。我が探し物を当て、その居場所を教えよ》

そうすると、さわやかな風がふき、お母様の居場所を教えてくれた。これは単一魔法といい、ひとつの魔法のみをもちいるものだ。本来は探し物をあてるだけなんだけど、場所までわかるように、私のアレンジを加えてある。

「お母様を見つけました。会場入口にいるようです。ごめんなさい、早くいかなくてはいいけません」

「それでは、私と一緒に行きましょう。あなたの手をとることをお許しいただけますか、フィオレンティーナ嬢」

「はい、よろしく願います。すみません、お名をうかがっても構いませんか？名をおよびするのに、知らないのでは不便です」

「貴女自身が知りたいから、でないのが残念ですが。私の名前はシャルルです。覚えておいてください」

そういうと、シャルルさんはにっこりと、人当たりのよい笑顔をわたしに向けた。ああ、この素敵な笑顔にみなが瞬殺されるのね、とわたしは心の中で相槌をなんどもうった。だが、微笑みかけられて悪い気はしないので、わたしもにこ、とシャルルさんに微笑み返すのだった。

「フィオナちゃん！ママ、とっても探して・・・まあ！」

会場入り口までテレポートの魔法で移動すると、お母様がかけよってきて、心配げな顔を浮かべたかと思ったら、シャルルさんを見るなり目をぱちくり、としたあと暖かな表情にかわった。なんだ？

「シャルル殿下と一緒にだったのね。ありがとうございました、殿下」

「いいえ。私がフィオレンティーナ嬢を誘ったのですから。このまま、彼女をパートナーとしてお連れすることをお許しいただけますか？」

「もちろん、娘が了承すれば構わないですわ。どうする？フィオナちゃん」

にこにこ笑みをたやさず会話する、お母様とシャルルさん、もいい、シャルル殿下。そんなこと、急に聞かれて応えられるわけがない—————！！だけど、雰囲気からしてここはOKというべきところ。にこにこ笑ってわたしの反応をみられ続け、ついにわたし

は心の中で白旗をあげ、

「わたしでよろしければ、よろしくお願いいたします」

と返事を返したのだった。

1. 出会い（後書き）

フィオナちゃん、にこにこ攻撃に弱いようです（笑）

2. 社交界デビュー

シャルル殿下の腕になんとか腕をからませ、パーティ会場に入場するとざわつ、と会場がどよめいた。

「どなた？あの御令嬢は・・・」

「知らないのか？『レンディアの癒し姫』だ。なぜ殿下とともに？まさか、将来の伴侶を決められたのか？」

「うそっ！信じませんわ、殿下にはわたくしこそがふさわしいのにっ・・・！」

いやー！とか、きゃー！とか、悲鳴が聞こえた。聞こえてるのよ、あなた達・・・と思いつつも淑女としての礼を完璧にこなし、会場の中央にすすむ。ワルツの音楽が流れだした。リズムにあわせ、ステップをふむ。自分がへたとは思わないが、うまいともいえないと思っていた。が、殿下のリズムを感じて踊ると、自分がとてもうまく踊れているように感じた。

「お上手ですね、フィオレンティーナ嬢。このようにうまく踊る方は初めてです」

「そのようなこと・・・殿下がうまく躍らせてくれるのです。自分がうまいのではないことはわかっていますから」

「私がうまいというのですから、自信をお持ちください。あなたはお上手なのですよ」

「――ありがとうございます、シャルル殿下」

少しうつむきながら、ほおが赤くなっていくのを感じた。そんな顔して微笑まれたら、誰だって赤くなると思う。また、まわりで悲鳴がきこえたが、私のしったこっちゃないぞ。パートナーと言っても、

今回誘われただけなのだから。そう思ってくるつ、とターンをまわってみせると、ドレスがふわっ、と広がった。

「春の妖精みたいですわ・・・」

「本当だ、衣装とダンスがすごくあっている・・・」

「ステキですね・・・」

まわりがほう、と感嘆の息をはくのを遠くで踊りながらみる余裕すらあった。やはり殿下はうまいのだ。曲が終わり、最後の礼をお互いにとる。わっ！と拍手喝采となった。なんだか、パーティの主役になったような気分。シャルル殿下に腕をとられ次の曲がはじまる前にフロアの隅にくと、すぐに令嬢方に囲まれた。

「シャルル殿下！この方とはどういう関係ですか？」

「私も知りたいです！この方をパートナーとしてお連れになった理由はなにか、教えてくださいませ！」

「お願いします、殿下！」

令嬢方はぎらぎらした目つきで私を見ていた。それはそうだろう、いくら公爵家のひとり娘とはいえ、まだ12歳。殿下のお相手としてみるのは、納得がいかないのだと思う。少しずつ距離をとろう、と離れようとしたら、手をとられ、手の甲に口づけられた。

「——この方は、私が心を奪われた唯一の女性。私の春の女神なんです」

ちょっとまった——！なんてことを言うんだ、殿下。手を放したくとも、つかまれている力が強く、ふりほどけない。令嬢方はまたもや、悲鳴を上げ、中にはふらふらと倒れたりも。お母様、いいこととはこのことだったのですか——？この発言により、私はいち貴

族の令嬢から、世継ぎの王子の想い人として、一躍時の人となったのである。

3. 兄たちとの再会

パーティが終わってから、ご令嬢方の追及の手を逃れたわたし。オ
ンナの嫉妬はこわいものがあるので、まだ12歳であることを強調
し、シャルル殿下の気が変わらないとは限らない、といっておいた
のだ。早々にお母様をつかまえて自宅にもどり、お兄様方と会うこ
とはかなわなかった。しばらくぶりに、再会できるはずだったんだ
けどなあ。わたしはいつもの元気がなく、やや落ち込んでいた。

「どうしたの、フィオナちゃん。今日はサーディとシヴィルが帰っ
てくるって連絡がはいったのに」

「本当ですか、お母様！嬉しいです、すぐにお出迎えの用意をいた
しましょう。お兄様たちはいつまで滞在してくださるのでしょうか
？」

「まだ聞いてなくてね。あの二人ならすぐよ、・・・ね？」

魔力が部屋の中に集中していくのを感じていたら、シュンっ！と
音がしてお兄様方が姿をみせた。すぐに、そばによって抱きつく。
お兄様方は嬉しそうに微笑み、だきとめてくれた。

「おかえりなさいませ！ずっと、お会いしたかったです。今回はい
つまで屋敷におられますか？」

「しばらく、一緒だよ。嬉しいな、僕たちもだよ、フィオナ。可愛
い僕らの天使。しばらくぶりだね。元気にしてたかい？」

「はい、フィオナは毎日元気にしておりました！お兄様方に追いつ
けるよう、日々努力しております」

離れながらそういうと、お兄様方とお母様とテーブルにつく。ルチ
ルに紅茶をいれてもらった。暖かな、カシユカシユの紅茶。香りが

たちのぼり、味わいながら飲む。日本でもあった紅茶がルーディニアにもあるのは、嬉しいことだった。考えながら飲んでいたら、かるく肩をつかまれた。

「————フィオナ、聞いてるの？」

「！すみません、お兄様方。考え事をしておりました。もう一度、おっしゃっていただけますか？」

「だから、シャルル殿下の想い人になったって本当？僕達、王宮で聞いたときびっくりしちゃったよ、……ってフィオナ？なんでもせてるの？」

「ごほっごほっ、だ、誰がそんなことを……」

「え？シャルル殿下ご自身がだよ。いつも、貴族の若い女性にきかれては、フィオナが唯一想う女性だとお答えされているよ。幸せ者だね、フィオナは」

本当に嬉しそうにお兄様方は微笑むが、そのむこうにご令嬢方のこわーい顔がみえた気がして、若干引いてしまう私だった。

4. 紅の薔薇

お兄様たちは言葉通り、しばらく滞在してくれるようだ。今日も連携魔術の実践を空間をつくってしているのを、わたしは防護壁を築いてみていた。

（あれから、うわさはどうなったのかな？消えたのだといいんだけど・・・。これから王宮へいくことがあれば、また言われかねないし・・・）

雑念は、防護壁を鈍らせる。そのため、すぐに考えをうちけし、新たな防護壁をはる。これでよし、と。にしても、あれからシャルル殿下は何も動きがないみたいだ。もしかして、諦めてくださったのかしら——？希望的観測はその日の午後にやぶられた。大輪のバラが我が家に届けられたのだ。

「このバラは、どなたからなのですか？お母様」

「あらあ、フィオナちゃん。もちろん、シャルル殿下からよ。メッセージカードがついてるわね。あけてみなさいな」

「メッセージカード、ですか？あけてみます・・・。なにに、私の愛しき妖精へ、愛をこめてこのバラを贈ります——このバラは、魔法ではありませんね？お母様。王宮に咲いているものではありませんか？」

「そうね。これは、サーデイたちが詳しいのではなくて？ねえ、サーデイ、シヴィル」

「そうですね。これは、王宮の中庭に咲くものです。王家からこのバラを贈る意味って知ってるかな、僕らのフィオナ」

バラを贈る意味？きよとん、と首をかしげると、くすつと笑みをも
らしてからシヴィルお兄様が教えてくれた。

「このバラは、特別のもの。王家から贈られるものには、求婚の意
味があるんだよ。フィオナ」

「！求婚、ですか？わたしに？シャルル殿下が？」

「僕たちもびっくりだよ。ねえ、サーディ？」

「うん、シヴィル。まさか、紅の薔薇を贈られるほど、フィオナが
想われてるなんて、思ってもなかったよ」

そうだよねえ、うんうん、と頷きあうお兄様たち。かくして、わた
しは今度はシャルル殿下に求婚されたものとして、王宮へむかうこ
とになったのである。

4. 紅の薔薇（後書き）

久々の更新です
W

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1608z/>

フィオナの転生物語

2011年12月16日07時45分発行